

ボイスチャットにおける非対面対話の韻律的特徴

The prosodic features of non face-to-face communication using voice chat

郭 森 (Byou Kaku) 指導：菊池 英明

1 はじめに

近年、インターネットやスマートフォンの普及に伴う、インターネット上の遠隔コミュニケーションが注目されている。また、SNSの流行により、ボイスチャットの使用量も増加している。ボイスチャットの非対面対話において、匿名性の低い他の対話場面よりも、話し手は自由に話し方を変化させていると考えられる。

本研究では、インターネットを介したボイスチャット場面では利用動機の違いにより話者の言動がどのように変わるのかに関心を定め、音声を介したボイスチャットの場面での話者の対話行動、特に話し方の変化に注目する。本研究の目的は、話者がボイスチャットを利用する際、利用動機や相手の性別によって話し方は変化するかどうか、また、どのように変化するのかを明らかにすることである。一般に対人関係を構築しようとする動機の有無によって話し方の変化が生じるが、ボイスチャットの非対面対話においてはそれがさらに顕著にあらわれると考えられる。

本研究では、初対面の人とチャットする目的に注目し、初対面の場面において、①相手に好かれないという動機を持たせるか否か、②相手が同性か異性か、という二つの条件を比較する。それぞれの条件において、話者の話し方が変わるかどうか、変わるのであれば、どのように変わるのかを明らかにする。また、変化の仕方に男女差があるかについても考察を行う。

2 対話収録実験

本実験では、話し手（被験者）の発話動機の有無と相手（実験協力者）の性別によって発話の韻律的特徴が変わるかどうか、どのように変わるかを調べることを目的とする。対話相手（実験協力者）は1名であり、4種類の対話条件に応じて異なる性別を演じて発話させる。初対面という設定のため、句末は「です、ます体」で対応させる。女性を演じる場合、顔文字を使わせる。収録を行ったのは、話し手（被験者）の音声のみである。

3 分析と考察

3.1 アンケート分析

まず、被験者のインターネットおよびSNS利用度、ボイスチャット利用経験、メールをやり取りする状況、対面会話状況などについて回答させる。また、被験者の対他者の

意識、認知や他者からの評価に対する態度と行動、他者との関係、自己意識、インターネット行動などを評価尺度を用いて評価させた。それぞれのアンケートについて分析を行った。

3.2 音声分析

自己紹介の1分間のうち、ほぼ被験者全員の発話で現れている「お願いします (o ne ga i si ma su)」を分析対象として選んだ。分析した特徴量は「お願いします (o ne ga i si ma su)」のf0基本周波数の動きと二重母音/ai/の第一フォルマント対第二フォルマントの動きである。

結果、同じ対話条件において、被験者全員に見られる特徴はなかったが、各被験者の特徴とアンケート調査の得点との関連が見られた。例えば、①ボイスチャットの未経験者は発話動機の有無や対話相手の性別に関係なく、/ai/のフォルマントの動きに違いが見られた。②「異性不安尺度」の得点が低い者は、相手の性別により、/ai/のF1-F2の動きに大きい違いが見られた。③「異性不安尺度」の得点が高い者は、発話動機を持たせない場合、相手の性別により、F0の高さに大きい違いが見られた。④「自己肯定意識尺度」の「被評価意識・対人緊張」項目の得点が高い者は、発話動機の有無により、/ai/のF1-F2の動きに大きい違いが見られた。

4 まとめ

本研究では、ボイスチャットを利用する際、発話動機の有無と対話相手の性別により、話者の韻律的特徴が変化すると仮定し、4つの対話条件を設定して対話収録実験を行った。まず、話者の韻律的特徴の変化と話者の性格との関連性を見るため、事前にアンケートに回答してもらった。性格に関する項目では、それぞれ被験者ごとの特徴があるが、音声分析の結果との関連がみられると考えている。また、話者の自己紹介の部分に注目し、音声分析を行った。

本研究は、ボイスチャットや音声研究などの補足として応用できると考えている。自然対話または新メディアの特性から新たな視点が展開され、次世代の新メディアへの注目を喚起されると考えている。また、ボイスチャットそのものの愛用、音声合成、音声対話システムなど工学的側面への応用の可能性も考えている。